
でいあまいはいすぐーる！

Peta

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

でいあまいはいすくーる！

【Zコード】

Z5819B

【作者名】

Peta

【あらすじ】

見た目女の子な男子高校生、柚木葵（16）は今日も学校に通います！でいあまいとらぶるめーかー、ふあみりーの続編です。読まなくとも分かります。

とある町のとある学校、いつも騒がしいこの高校は今日も……

柚木葵、16歳。現在ある問題を抱えている。気付いてしまった……

……アレが無い事に……

「…………であるからして、この場合の x は 1 となり……」

ポカポカと暖かいお昼前。退屈な数学の授業。わけの分からぬい公式やらが眠気を誘つ。だが寝るわけにはいかない。この授業が終わつたら……

キーン」「ーンカーン」「ーン……

来た！

「じやあ今日せいいまで。」

早くー早く終わるんだ！

「起立……禮。」

「おつがいがれこもつた。」

× 多数

挨拶を言い終わる前に駆け出す。勢いよく、Bのドアを開け放ち、目的地をを目指し走る。戦場…………もとい購買部へと…………

「ふらふらと力なくドアを開ける…………卑怯だろ…………授業が早く終わつてゐなんて…………。肩を落としながら席に戻る。

「よおー！その様子じや、駄目だつたみたいだな。」

「天斗

俺の隣の席で美味しそうに弁当を食べているのは七星天斗。黒髪のミディアムヘアで、前髪の赤いメッシュが特徴的だ。

「あのさ、天斗……」

「ええ、おおひ、せー！」

「いいじゃん！小学校からの付き合いじゃん！」

「お前が弁当を忘れたのが悪い。」

ぐつ………… もひともな事言いやがつて。まさか弁当を忘れるなんて………… 今田は良くない事が起つしそうだ。………… まあ、こゝ最近良いことなんて無かつたけど…………

「女装でもして違つクラスの男子にねだればくれるんじゃねえか？」

「そんなこと死んでもできるかー！」

「あつや。じゃあ餓死しとけ。」

「なんて事言いやがる」「ノヤローはー確に、この長い銀髪と女顔、おまけに蒼い眼。そいら辺の女子よりは可愛いいけど…………あー考えたら泣けてきた。

「てこーカ、そんなに氣にしてるんだつたらその長い髪の毛切つたらどうだ？」「冬姉に伸ばせって言われてんだよー。そんなことしたら殺されるー。」

冬姉こと柚木冬美は俺の姉だ。モデルをやつていてスタイルは抜群なのだが、どうやら俺をいじめる事が趣味らしい。前に黙つて髪を短くしたことがあるが、その時は半殺しにされたあげく、俺の服を全て捨てられ、代わりに母さんが買つてきていた女ものの洋服がクローゼットに並べられていた。

「嫌だつて言えばいいじゃねえか。」

「それこそ無理だ！初期の勇者が魔王に勝つぐらゐ無理だー。」

「あ～はいはい、わかつたよ。」

「ノヤロー、人事だと想いやがつて……

「葵へー。」

ふと俺を呼ぶ声が聞こえる。声の主はさうりの處の黒髪を揺りしながら近付いてくる。

「お。彼女が来たじゃねえか。弁当恵んでもらえ。」

「幼馴染みだつて！」

「二人でなんの話してるので？」

「いや、何でもない。」

「イツは俺の幼馴染みの如月夏澄。夏澄は可愛らしく弁当箱を抱えている。」

「一緒に弁当食べよ！」

「それが弁当忘れて来ちゃつてさ…………」

「しょ「うがない。」JUNは天斗の言つ通り夏澄に弁当を恵んでおりおつ。

「ちよ「うど良かつた！」

「？」

「はい、これあげる。」

夏澄はタッパーを俺に差し出した。

「調理実習で作ったカレーの残りだけど。」

夏澄はA組だ。そう言えば調理実習だつて言つてたな。とにかく助かつた！これで餓死せずに済みそうだ。

「…………」

「…………フタを開けて絶句した。

「赤い……」

「超激辛だから」

あ～なるほどね！超激辛だからか！唐辛子がなんかの色か～……

「殺す気か！……」

しかもルーしかないし……。

「ひどい！せつかく作ったのに……心を込めて激辛にしたのに……」

「うなだれる夏澄。……いや、普通にしろよ。調理実習なんだろ？いらない心を込めないでくれ……」

「葵ちゃん！……」

「わっ！？」

突然かけられた大声に驚く。声のした方を向けば、短い黒髪のボーグシューな美人が立っていた。

「あ、香織さん……」

「ちょっと来て！」

いきなり腕を引っ張られる。香織さんは夏澄の部活の先輩だ。ちなみに合気道部で、同好会だったのを幾度もの優勝で部に昇格させたほどの強者だ。力強い！……合気道って力の弱い人が強い人に勝つための武術じやなかつたつけ！？

「ちょ、強いですよ！香織さん！た、天斗……夏澄、助け…………！」

「無理！」

「無理だ。」

ひどい……即答！？

「助けて……！」

「どう！？ ぴつたりでしょ、佑季！……」
「確かに……適役だな。しかし男か……」
「そんなのいいじゃないの！」

香織さんと知らない女性が話している。肩にかかるぐらいの黒髪で日本の人という感じだ。……といつわけで、香織さんに連れられて生徒会室にいる。……なんで？

「あの……」
「この子で決まりでしょ！？」
「しかし男は……」
「もう！ 頭が固いんだから！ 女の子に見えれば問題ないでしょ！……！」

俺抜きで話が進んでいく……なんだか不穏な言葉が聞こえた気がするけど……？

「むう……確かに女子に見えれば問題ないが……」

「じゃあ決まりね！ 決まりっ！」

「仕方あるまい。その線で行こう。」

なんか話がまとまつたらしい。なんだろ? 激く嫌な予感がする.....

「えつと.....君、すまないが自己紹介をしてくれないか?」
「えつ?あ、はい。1 Bの柚木葵ですけど.....」

何なのだろうか。といつかこの人は誰だ?

「私は2 Aの獅堂佑季だ。生徒会長をやらせてもらつてこる。」

生徒会長!? そんな人が俺に何の用だろ?!

「では柚木、映画のヒロインは任せたぞ。」

..... What? 映画って何? ヒロインって? -?

「何だ、聞いてないのか?」

「香織さん.....?」

「ごめん! 言つてなかつたつけ?」

聞いてねえ! いきなり引っ張られて来たんだし!

「実はね、もうすぐ新入生が入つて来るでしょ?」

暦は2月。確にもうすぐ新学期だ。

「それでね、新入生の歓迎会では部活ごとに何かやらなきゃいけないんだ。それで生徒会は自作映画を放映する事になったの。ちなみに学園恋愛モノね。」

……あれ？

「香織さんは合氣道部じゃないんですか？」

「そうなんだけど、生徒会役員でもあるから…」

「生徒会役員も部活をやつている者がほとんどだ。その者達は撮影に参加できない。そこで部活も何もしていないやつらの中から役者を選んでいる訳だ。」

それでヒロインに俺が選ばれたと……俺、男なんだけど？

「香織さん……？俺、男ですよ？」

「うん。知ってるよ！」

知ってるよーつておい！

「大丈夫だ。女子に見えれば問題はない。」

ちよつと…会長…？

「なんで俺じゃなきゃいけないんですか！」

「ヒロインはね、転校してきたばかりのクオーターの女の子つて設定なの。ぴつたりでしょ？」

うんうんと一人頷く香織さん。ぴつたりでしょって……ていうか何でその設定にしたんだ…

「でも、相手役が決まってないのよね～。そうだ…さつき一緒にいた男の子つて葵ちゃんの友達？」

さつき一緒にいた？ああ、天斗か。

「友達ですけど……」

「あの子、カツコ良かつたから相手は彼に決定ね！」

.....

「そんなにカツコ良いのか？」

「かなりイケメンだつたよ 前髪に赤いメッシュユグアつて……」

「ああ、七星か！あいつなら問題ないな。」

「知り合い？」

「家が近所だからな。」

「会長？香織さん？あの

それじゃ、ヒュン役と七星くんの説得力があつくな、葵ちゃん

「頼んだぞ、柚木。む？ もう昼休みが終わってしまったな。教室に戻らねば！」

「じゃあ一ね、葵ちゃん よろしく

そう言つて二人とも生徒会室から出ていった。なにこれ？決定なの！？なんか腹も減つてきたし……そういえば昼飯も食つてねえ泣いていいかな？俺、なんでいつもこんな目に……

誰もいない生徒会室に俺の悲痛な叫びが響いた。

その後、春休みをすべて返上して撮影が行われ、天斗に向かって歯の浮くようなセリフをいい続けた。そして新入生の歓迎会で完成した映画が放送され、『あの娘はだれだ！』と新入生、在校生ともに反響を呼んだのだった……

後日談

「葵兄。」
「なんだ。」
「歓迎会の時の生徒会の映画良かつたね。」
「そうか……」
「特にヒロインが『あなたの事が好きなの！』って言う所が
「もうやめて……」

END

(後書き)

どうも！テストが終わって若干テンションがおかしいペたです！さて、今回は学校編をお送りしました。なんか、キャラが変わってるような気がしないでもないです……もともと、とらぶるめーかーだけで終わるつもりだったので……正直、考えたけど使わなかつたキャラを出してるだけです！まあ、というわけで（？）評価、感想をいただけると幸いです。連載にして欲しいという嬉しい言葉を頂いたのですが、どうしよう……f^-^；それではまたお目にかかる日まで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5819b/>

でいあまいはいすくーる！

2010年10月12日13時51分発行